《１５－４》　雑感

福井　捷朗

【１】「局所的人口圧の軽減」

一般に時間と共に、人口が増加し、土地に対する人口圧が増大すると言われる。しかし、局所的に見れば、その逆が起ている場合が多いのではないか？

とくに低開発国では、近い過去に村落レベルで人口圧の軽減が一時的に起きていたと思われる。

局所的な人口圧の軽減は、少なくとも、次のふたつの場合に起こったはずである。すなわち、
（ａ）治安状態の改善によって集落の小規模化や分散が可能となり、その結果、一人当の耕地面積が増加する場合。
（ｂ）生産のための投入や生産技術の改良によって、一人当耕地面積が増加する場合。

ＤＤにおいてもこのようなことがあったかも知れない。例えば、Zimmermannの調査によれば、東北タイの当時の平均水田耕作面積は、現在のそれより小さかったが、その理由は、その後の治安の改善や技術の改良、畜力投入の増加であったと考えられる。

いずれにせよ、人口圧が増加するだけでなく、逆に軽減する場合も十分考慮しないと、とんだ間違いを犯すかも知れない。

【２】「過少人口密度の状態における土地相続の意味」

土地に対する人口の圧力が小さい場合、土地相続の意味は、そうでない場合より小さい。今日のような人口圧力の下での土地相続の意味を前提として、過去の相続をみてはいけない。

土地の重要性の時代的変化をまず知ること。その上で、土地相続を考えること。

（以上、坪内氏の忠告。）

〔3〕「ＤＤ相続形態と資源量、生業との関係」

ＤＤにおける相続形態の特徴は、男より女の優先と、姉妹の中では末娘優先である。このような形態がムラの生業（稲作）や資源量（土地）とどのように関連しているのか？

このことをＤＤだけのデータで論ずるのとは別に、世界的にみてこれらの間の関係がどう論ぜられているのかにも注目すること。

例えば、
内藤莞爾。『末子相続の研究』。　弘文堂。昭和５０年？

（以上、武邑氏による。）

〔4〕「相続物件にみられる男女差」

舟橋によると、娘が水田を相続し、息子が未開墾の林地を相続している例があるという。息子が相続した林地は、その後、開墾され、今では娘の相続した水田よりも優良な水田となっている。

ＤＤにおいて主として娘が水田を相続することは、今さら言うまでもない。その理由が妻方居住制にあり、必ずしも、娘優先の原則によるのでないことも、幾度か指摘された。にもかかわらず、相続物件に男女差があることは歴然としている。すなはち、娘の水田に対して、息子は水牛、現金、土地ならば水田よりも畑地である。この差は、何を意味するのであろうか。

相続物件における男女差は、ラーオ社会における男女の役割の差を反映しているのではなかろうか。そしてラーオ社会が開拓者性をもって特徴づけられるとすれば、このような男女差は、開拓のプロセスにおける男女の役割の差を反映していると言えようか。すなはち、女は開拓された農地の維持を役目とし、開拓の先兵としての役目が男のものである。

開拓者性をもつ民族は、ラーオ人に限られない。もし開拓者性と、このような相続における男女差とが不可分の関係にあるとすれば、同じような現象が開拓者性をもつ他の民族にも共通にみられるはずである。はたしてそうか。

〔5〕　「僧侶とモータムは対立概念ではない」

モータムは、出家している。出家中にモータムとしての訓練を受けたものさえいる。モータムの守る禁忌は、仏教の戒と共通している。このようなことからみても、モータムと僧侶とを、仏教と世俗信仰との対立と考えることは妥当ではない。

村人の僧侶に対する態度、僧侶の村人との関係からみて、僧侶は村人がブンを積むための制度の一部であって、個人的な指導、助言、尊敬といったものは、両者の間にない。僧侶は人形である。

村人としては、小乗仏教とはこゆうものだとして受止めている。それなりの効用を認めている。しかし、それだけでは満たされない不満をもつ。それをモータムに求める。

かくて、モータムと僧侶とは対立関係にあるのではなくて、相互補完的な関係にあるものと考えられないか。

（石井教授との会話から）

〔6〕　「村長選出の時代的変化」

村外との接触、とくに政府機関との補助金などをめぐる駆引が重要になってくると、従来のような伝統的価値観によって指導者とみなされていたモータムなどの村の長老は、もはや村長に選ばれず、代って、若い現代的知識と能力のある人が選ばれるというが、はたしてそうか？

ポー・ニコンは、若くして村長に選ばれている。ボクサーとしての腕力と勇気、あるいはナクレン性が買われたのかも知れない。行政的手腕ではないが、外部との接触、この場合は治安の維持と思われる、を目的として、従来の指導者とは異なった人物を選ぶことは、今に始まったことではない。

〔7〕「菜園の作物種の年変動」

１９８３年は、降雨が例外的に良かったので、水稲作は空前の大豊作となった。

その年、菜園にはトウガラシのみが卓越し、その他の野菜類が例年になく少なかったといわれる。もしそれが本当なら、稲の収穫のため労働力がそちらにとられ、菜園が手抜きになったせいと考えられる。